

新年明けましておめでとうございます。
東京大学の古澤でございます。

いつも光量子コンピューター研究に温かいご支援を賜り誠にありがとうございます。新年が皆様にとってより良い一年になることを願っております。新年のご挨拶を兼ねて、最近の活動についてご報告させていただきます。

私は学会等で海外出張が多いのですが、デンマークのコペンハーゲンにあるニールス・ボーア研究所を昨年11月21日に訪問したのがもっとも刺激になりました。この研究所は1921年に理論物理研究所として設立されました。その中心的な役割を果たしたのがデンマークの物理学者で1922年にノーベル物理学賞を受賞したニールス・ボーアです。後に彼の名前を冠するようになりました。

ボーアをはじめ、ドイツのヴェルナー・ハイゼンベルク（1932年ノーベル物理学賞）やイギリスのポール・ディラック（1933年ノーベル物理学賞）ら錚々たる面々がこの研究所に集い、初期の量子論を発展させました。当初、彼らの理論に懐疑的だったアインシュタインに対して、「コペンハーゲン解釈（学派）」と呼ばれています。

駐日デンマーク大使館とデンマーク高等教育科学省が共催した「Danish-Japanese conference focusing on collaboration in quantum technology」という会議に参加したのですが、大学院生7人を連れて行きました。「量子論の聖地」のような研究所を訪れ、「量子論の父」といえる学者たちが議論を交わした当時のままの教室で、会議に参加したことは私以上に若い研究者を刺激し、近い将来大きな成果をもたらしてくれると期待しています。

実は、ニールス・ボーア研究所も設立当時から今日まで、民間からのご寄付によって支えられています。公的な資金による研究も大事ですが、往々にして拙速な成果を求められます。皆様のご寄付によるサポートが研究の自由度を広げ、後進の育成にも大いに役立っています。今回の学生たちの渡航費を皆様のご寄付の一部から充当させていただきましたことをご報告し、あらためて御礼申し上げます。

本年もよろしくお願い申し上げます。



- ① ニールス・ボーア研究所に残る集合写真。前列左端からニールス・ボーア、ポール・ディラック、ヴェルナー・ハイゼンベルク等々綺羅星のように研究者が並ぶ
- ② ①と同じ教室で参加者の集合写真。前列右から3人目が私で、私の右側が光格子時計の香取秀俊教授、小さくて見えますが、後ろの方に武田俊太郎准教授も
- ③ 歴史的な教室で私の研究成果の紹介をしました
- ④ 当時のまま保存されているボーアのデスクで

※ 大きな画像は古澤研のホームページをご覧ください。

<http://www.alice.t.u-tokyo.ac.jp>